

124年年会記事(愛媛大会)

の色変化と気象の関係。*酒本直弥・清川昌一

(T8-P-1) 紀伊半島東部、中央構造線沿いにおける脆性-延性遷移領域周辺の変形支配過程。*香取拓馬・重松紀生・福本峻吾・亀田純・小林健太・豊島剛志

(T8-P-3) 布田川断層帯の過去の運動像と周辺域の古応力解析。*戸澤茉莉花・大橋聖和

(T8-P-4) 四国西部における唐崎マイロナイト及びその相当岩体の広がりとその岩石学的特徴、構造。*川口健太・早坂康隆

優秀ポスター賞

愛媛大会では、232件のポスター発表の申込があったが、台風により2日目(17日)のプログラムはすべて中止となった。そのため、17日に予定されていたポスター発表のうち、希望者を対象に(学生・院生限定)、特別セッションとして翌18日に発表が行われた(本誌4ページ参照)。

大会1日目(9/16)

R9-P-5: 新第三紀中期中新世・鮮新世の古風化強度変遷史: 古土壌相, 化学風化度, 粘土鉱物組成を指標値として。*葉田野希・吉田孝紀・入江志織・森 沙織・名取和香子・足立佳子・笹尾英嗣

R13-P-7: 緑泥石かんらん岩中の10ミクロン径かんらん石の動的再結晶。*駒井美穂・水上知行・新井 翔・永治方敬・ウォリスサイモン

R16-P-1: 内在性単体イシサングの軟底質への適応戦略。*千徳明日香・徳田悠希・江崎洋一・Gregory WEBB

大会2日目(9/17)

プログラム中止

大会3日目(9/18)

R5-P-11: 房総半島に分布する下部更新統千倉層群上部および上総層群下部における古地磁気変動対比。*小西拓海・岡田誠・丸岡亨・宇都宮正志

R5-P-16: 檜・穂高連峰の東方傾動隆起: 地表踏査と微動アレー探査による断層運動の解析。*本合弘樹・井上篤・原山智

R10-P-1: 前期/後期石炭紀境界付近の秋吉石灰岩層群で見られる層孔虫様生物と礁構造の多様性。*増井充・江崎洋一・長井孝一・杵山哲男・足立奈津子

R15-P-12: 室戸岬の変形した中期中新世貫入岩の古方位と当時の応力状態の復元の試み。*羽地俊樹・佐藤活志

R23-P-1: 硫黄同位体比から探る32億年前のDXCL掘削コア中の微小球殻状黄鉄鉱形成過程。*三木翼・清川昌一・高畑直人・石田章純・伊藤孝・池原実・山口耕生・佐野有司

T8-P-1 (特別セッション): 紀伊半島東部、中央構造線沿いにおける脆性-延性遷移領域周辺の変形支配過程。*香取拓馬・重松紀生・福本峻吾・亀田純・小林健太・豊島剛志

R14-P-2 (特別セッション): 炭質物のラマンスペクトルを用いた断層における摩擦熱の検出。*伊東慶祐・氏家恒太郎・鍵裕之

審査委員

9/16: 浅田美穂・上松佐知子・西田尚史・吉田英一・竹下欣宏・鏑本武久・竹下 徹・狩野彰宏(取りまとめ: 保柳)

9/18: 天野一男・納谷友規・亀高正男・田村嘉之・黒田潤一郎・内野隆之・奈良正和・田村芳彦(取りまとめ: 保柳)

9/18特別セッション担当: 桑谷 立・山本高司・山本由弦・上澤真平・斎藤 哲・狩野彰宏(取りまとめ: 狩野)

(各賞選考委員会 保柳康一・狩野彰宏)



熱い議論がかわされる、ポスター会場。

ランチョン

9月16日(土) 12:45-13:45

古生物部会

会場: 第3会場(A21)

世話人: 上松佐知子

古生物部会では大会一日目レギュラーセッション「ジュラ系+」, 「古生物」に引き続き、ランチョンを開催した。参加者は約15名。内容は主に地質学会古生物部会の現在の活動と今後の予定に関する会員の意見収集および議論である。まず古生物部会・委員の改選と活動内容について現在の状況を確認し、会員の意見交換を行った。また、来年度地質学会のセッション内容・招待講演・部会員への連絡手段等について包括的に議論した。今後ともこれらの点について、引き続き検討していく予定である。

(上松佐知子)

ジオパークにおける自然保護

会場: 第4会場(A24)

世話人: 天野一男

出席者: 天野一男・大友幸子・斎藤 真・鈴

木博之・高木英雄・竹之内 耕・常盤井守興・中村千怜・平田大二・藤本幸雄・三上禎次・宮下純夫(50音順)

最近、ジオパーク内における研究調査に際し、自然保護に関してジオパーク側と研究者側との調整が必要となる事例が発生している。今後のジオパークの一層の発展のためにも相互理解が必要となるが、その方策について検討した。

最初に竹之内氏から、あるジオパークにおいて、大学研究者による地質調査に対して国定公園監視を委託されている方からのクレームがあったという事例について、報告がなされた。研究者側としても自然の保全への意識を持ち、ルールに従った研究調査を実施することは当然であるが、形式的にルールを突き詰めていくと、スムーズな研究調査が展開できないという状況が発生する可能性がある。ジオパークの展開には、研究者による学術的な支援が必要不可欠である。そのためにはジオパークと研究者との親密な関係を維持していくことが重要である。

具体的には、地質調査に当たって計画書をジオパークに提出することが提案された。提出に当たっては、ジオパーク側から保全に関する情報を提供して欲しいとの意見があった。できれば、ジオパークのウェブサイトにも保全情報が掲載されていると調査計画を立てる際にも役立つ。また、計画書のフォーマットもウェブサイトからダウンロードできるようになっていると便利であろうとの意見もあった。

いずれにしても、研究者とジオパークは互いに連携しあってジオパークを発展させることが大切であるが、現時点ではその条件はほとんど整っていない。今後の方針として、学会とJGNが緊密に連絡を取りながら、保全の方法をさぐる必要があることを確認した。

(文責 天野)

堆積地質部会

会場: 第5会場(A31)

世話人: 西田尚史

堆積地質部会ランチョンは大会初日(9月16日)に開催され、部会活動に関する報告と情報交換が行われた。参加者数は20名であった。はじめに部会幹事の交代について審議され、庶務の渡邊 剛氏(北海道大)から太田 亨氏(早稲田大)に交代することが提案され、了承された。関連して、部会長の横川美和氏(大阪工業大)より、部会幹事の任期と交代について確認の説明があった。また、地質学会125周年記念の地質学雑誌特集号の部会提案号「堆積地質学の日本における進展と展望、最近25年を中心として(仮題)」について、進捗の報告があった。他に、部会幹事からの報告、4つのレギュラーセッションについて世話人からの報告、来年度地質学会の案内、炭酸塩コロキウム、JpGU、堆積学会、有機地球化学シンポ、ISC2018、